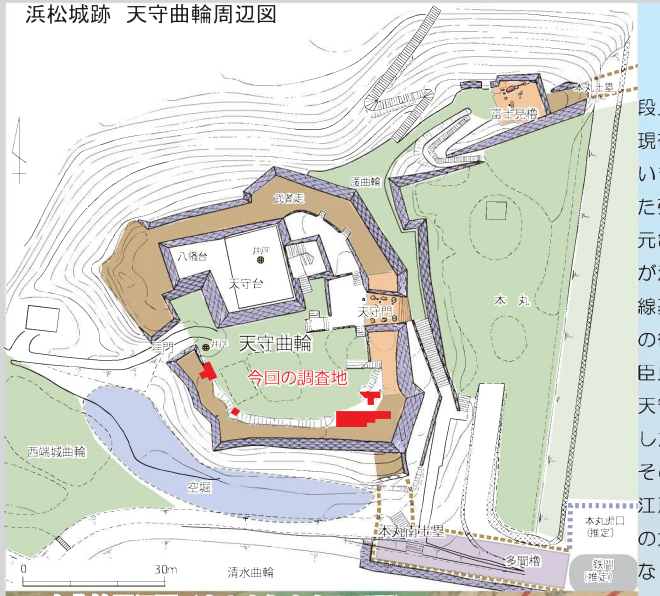
はままつじょうあと

浜松城跡 24 次

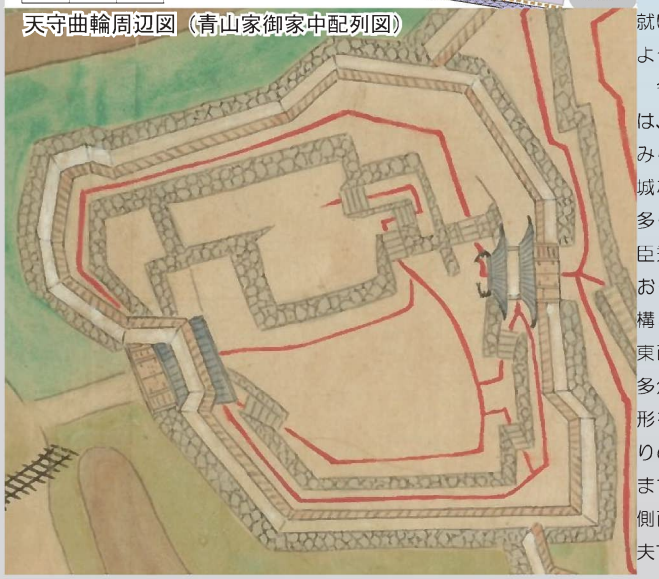
― 発掘調査現地説明会資料 ―

浜松市文化財課　2018 年 11 月 3 日・4 日

浜松城跡　天守曲輪周辺図



天守曲輪周辺図（青山家御家中配列図）



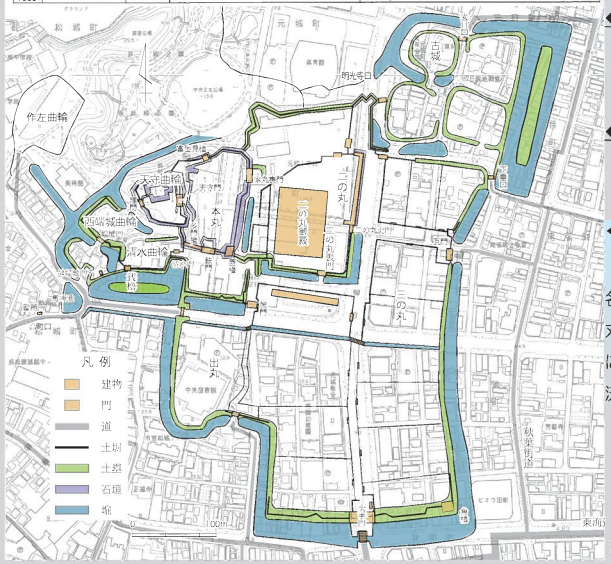
浜松城跡

浜松城は、三方原台地の東縁にあたる段丘を利用した平山城で、浜松城下町は現在みられる浜松市街地の原点となっています。浜松城は、15 世紀頃に築かれた引馬城（ひくまじょう）が前身となり、元亀元年（1570）に入城した徳川家康が浜松城と改称し、武田信玄に対する前線基地として拡張、整備されました。その後、家康の関東移封に伴い入城した豊臣氏家臣の堀尾吉晴によって高い石垣と天守をもつ豪壮な城郭として姿を変えました。現在、浜松城公園に残る石垣は、その時代に築かれたものとみられます。江戸時代に入ると、城主は代々徳川譜代の大名が務めることとなり、浜松城主となった多くの大名がのちに幕府の要職に就いたため、「出世城」としても知られるようになりました。

今回発掘調査した天守曲輪（てんしゅくるわ）は、堀尾吉晴が城主の時代に築かれたとみられます。天守曲輪は掛川城や和歌山城などにも見られますが、類例は決して多くありません。掛川城や和歌山城は豊臣秀吉との関わりが深い人物が築城しており、天守曲輪は秀吉と深くかかわる遺構ともいえます。浜松城の天守曲輪は、東西約 56 m、南北約 68 mのいびつな多角形をしています。これは自然の山の形を反映した結果と考えられ、石垣づくりの曲輪としては古相を留めた姿といえます。こうした複雑な形状は、迫る敵に側面から攻撃を加えやすくするための工夫でもありました。

浜松城歴代城主と出土遺物

西暦	城主	支配者	関連出土品	できごと
1565	飯尾賢連・乗連・連竜	今川氏	俣沓 / かわらけ（灯明皿）/ 瀬戸美濃天目茶碗	1560(永禄三)年　桶狭間の戦い 1565(永禄八)年　今川氏真、飯尾連竜を殺害
1570	徳川家康	徳川氏	俣沓 / かわらけ（灯明皿）/ 瀬戸美濃折縁	1568(永禄十一)年　徳川家康、遠江に侵攻 1572(元亀三)年　三方ヶ原の戦い、家康敗北 1578(天正六)年　浜松城修築（天正九年まで） 1579(天正七)年　信長の命で、築山殿と信康を殺害
1590	（継代）菅沼定政			1586(天正十四)年　家康、秀吉の臣下となる 1590(天正十八)年　秀吉、家康に関東移封を命ず
1600	堀尾吉晴・忠氏	豊臣氏	堀尾紋軒平瓦	1598(慶長三)年　秀吉没する 1600(慶長五)年　関ヶ原の戦い 1601(慶長六)年　家康、東海道に伝馬制を制定
1601	松平忠頼	徳川氏（一門・譜代家）		
1609	水野重仲			1616(元和二)年　家康没する 1619(元和五)年　徳川頼宣、紀伊に移封される
1619	高力忠房			1620(元和六)年　幕府、諸大名に大阪城の修築を命ずる
1638	松平乗寿			
1644	太田資宗・資次		太田氏抬葵紋軒丸瓦	1655(明暦元)年　大風雨により、浜松城内に被害 1675(延宝三)年　小天竜が彦助堤により締切り
1678	青山宗俊・忠雄・忠重		青山氏無字鐵紋軒丸瓦	1680(延宝八)年　大風により、浜松城内に被害 1691(元禄四)年　城内の屋敷で火災 1700(元禄十三)年　城内の屋敷で火災
1700				
1702	本庄（松平）資俊・資訓		本庄（松平）氏九目紋軒丸瓦	1706(宝永三)年　城内の屋敷で火災
1729	松平信祝・信復			
1749	松平（本庄）資聞・資昌		松平（本庄）氏九目紋軒丸瓦（縮尺 1/12）	
1758	井上正経・正定・正甫		井上氏井桁紋軒丸瓦	
1800				
1817	水野忠邦・忠精		水野氏沢瀉紋軒平瓦（縮尺半分）/ 沢瀉紋鬼瓦の破片	1822(文政五)年　鉄門東櫓を修理する
1845	井上正春・正直		井上氏浜荻紋軒丸瓦（縮尺 1/12）	1854(安政元)年　翌年にかけて2 度の地震で被害 1860(万延元)年　天竜川が決壊し、城下に被害
1868				1868(慶応四・明治元)年　戊辰戦争、明治と改元



《用語解説》

◆平山城（ひらやまじろ）

城の立地による分類の一つ。低い山・丘とその周辺の平地を利用して築かれた城。

◆ 天 守 （ てんしゅ ）

三階、四階建ての大櫓（おおやぐら）を祖とする建物。一つの城の象徴として高い格式を誇った。

◆ 曲 輪 （ くるわ ）

城を構成する本丸・二の丸などの区画。郭とも書く。

◆ 石 垣 （ せきるい ）

石垣を築き固めた土手。

◆櫓（やぐら）

城郭内に建てられた建築物で、監視・防御を目的とするものや、物資の貯蔵にも使用された。

◆ 土 塀 （ どべい ）

城を取り囲む壁や塁の上に建てられる塀で、木材の骨組に土を塗り固めたものと、骨組を持たず使用済みの瓦や小石・砂利等を芯にして土を固めたものとがある。

◆野面積（のづらづみ）

石垣の積み方の一種で、自然の石をあまり加工しないで積み上げたもの。

◆裏込（うらごめ）

石垣の背後に排水と補強のために詰められる小石のこと。

◆ 堀尾吉晴（ほりおよしはる）

岩倉織田氏の家臣の子で、信長・秀吉・家康に仕えた武将。1590 年に遠江浜松 12 万石の領主として浜松城に入城し、浜松城を豪壮な天守と高い石垣づくりの姿に変えた。

◆青山家御家中配列図（あおやまけごかちゅうはいれつず）

青山氏が浜松城主だった時代（1678-1702）に描かれた城下図。城内の様子が詳細に描かれており、天守台はあるが、天守閣は描かれていない。

◆家紋瓦（かもんがわら）

軒瓦の一種で、軒に家紋をあしらった瓦。浜松城では城主が替わるたびに葺き替えられていた。

◀江戸時代の浜松城復元図

浜松城は、江戸時代になると、徳川譜代の大名が治める城となり、二の丸御殿の建設や三の丸への拡大整備が行われました。浜松城と一体になって整えられた城下町とともに、政治・経済の拠点として栄えました。

※注意事項

・新聞やテレビ、ホームページで現地説明会の様子が紹介される可能性がございますので、あらかじめご了承ください。

・SNS やインターネットに写真を掲載する際、個人が特定されるような写真は掲載を控えていただくようお願いします。

浜松市文化財課　TEL：053(457)2466

安土桃山時代の櫓を発見

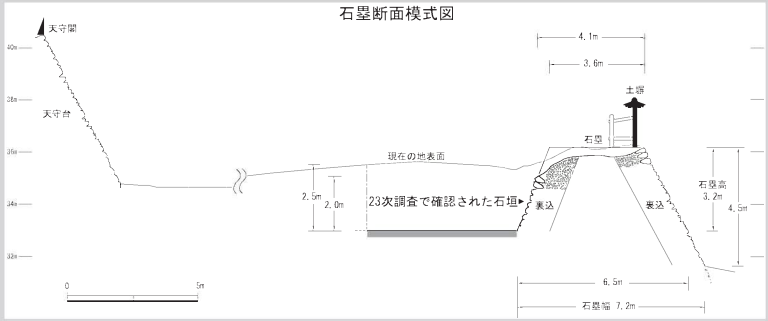
今回の調査では、天守曲輪内を４箇所発掘調査しました。23 次調査（2018 年１月～３月）で確認された、瓦が大量に集積した瓦溜りと、石塁の詳細な状況を確認することを目指しました。調査によって石塁の形や瓦溜りの詳細な状況が明らかとなりました。また、天守曲輪南東部に、絵図面には描かれていない櫓の存在が初めて確認されました。

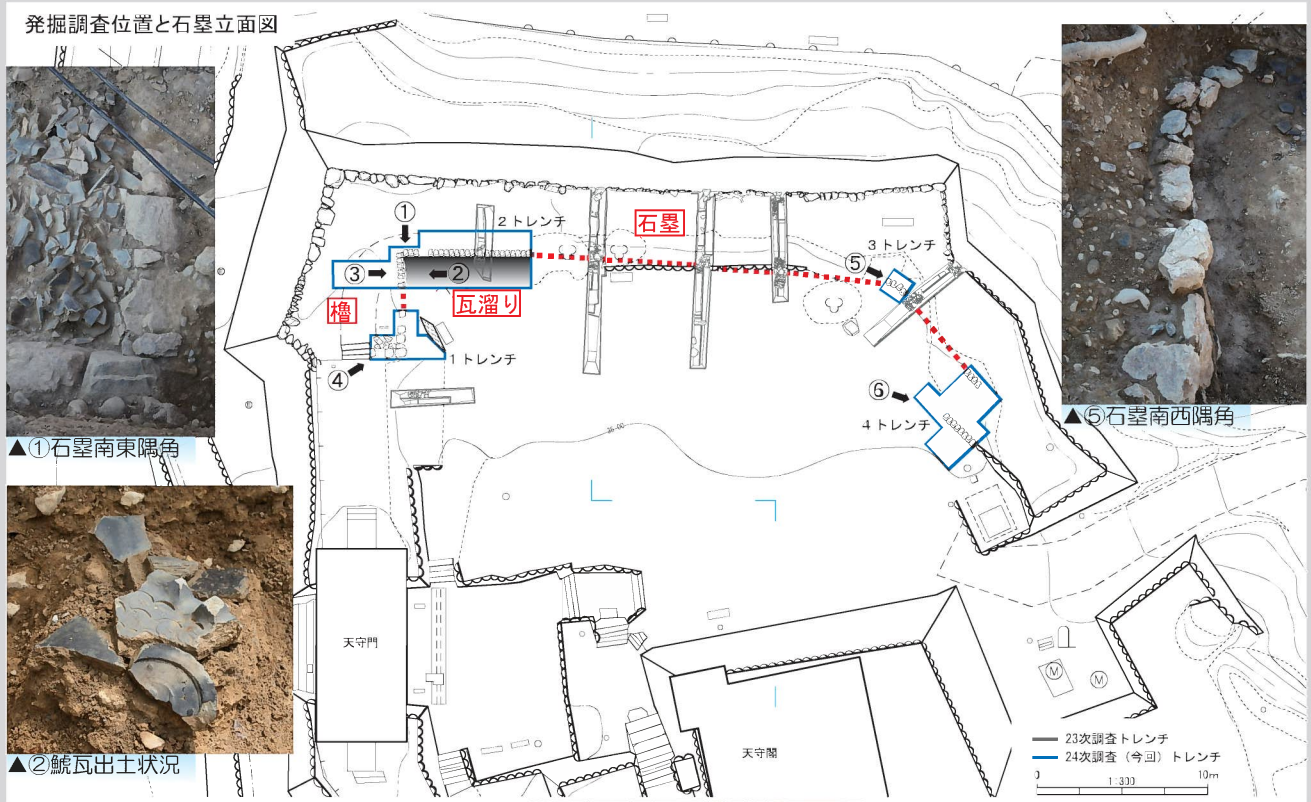
石塁は、南東隅でほぼ直角に折れています。また、この屈曲部から北に６mの位置に櫓の基礎と捉えられる石列が確認できました。屈曲部の脇からは大量に集積された瓦が確認されています。瓦が折り重なっていることや、割れの少ない完形の瓦が多いことなどから、天守曲輪南東隅にあった櫓が倒壊して埋もれた状況を想像させます。瓦の製作技法や模様の特徴がすべて堀尾吉晴が城主であった頃（1590-1600:安土桃山時代)のものであることから、この時期に櫓があったと考えられます。

浜松城の天守曲輪に、いままで存在が知られていなかった櫓が確認されたことで、天守曲輪の構造を把握する上で重要な成果を得ることができました。

▲出土遺物

今回の調査では、屋根の軒に葺かれる模様が入った軒瓦（のきがわら）や、屋根の頂部に葺かれる鯱瓦（しゃちがわら）などが出土しました。鯱瓦は２点出土しましたが、厚さや鱗（うろこ）の表現がそれぞれ異なるため、作成された年代が違うと思われます。





▲①石塁南東隅角

▲②鯱瓦出土状況

▲⑤石塁南西隅角

▲③天守曲輪南東部の瓦溜り

堀尾吉晴在城期（1590～1600 年）に使用された瓦が大量に出土しました。

▲④櫓台北西隅

▲⑥埋門南側の石塁

▲ 23 次調査で確認された石塁

※ 2018 年２月調査時の写真です。